当世妙奇話 上

208
2
156

国立国会図書館　当世奇話 2巻 208-156

ガラス使用

国立国会図書館　当世奇話 2巻 208-156

ガラス使用

自叙

吳館内倦睡隱几、有客稱子墨客卿、來而閲九上之書、赫然而怒曰、古蒼頡造字、天雨粟、鬼夜哭、正為汝輩而哭也、夫文者貫道之器、經國大業、不朽盛事、豈為謗毀而設乎哉、

長嶋町五丁目 大野屋惣八

国立国会図書館　当世奇話 2巻 208-156

ガラス使用

此書所列、皆當世俊傑、藉不能褒揚、何忍為此、而毒口謗訕、毫無忌憚、蒼蠅玷璧、跖犬吠堯、良有似也、豈非拔舌之業果哉、答曰、唯〻否〻、夫此書所列、實當世英傑、然君請看、彼輩讀之、將為何態、其上者、輾然而咍、置毀譽於度外、其下者、方奮拳角口、忿懥怒爭、不知其謗之愈大而其短之愈顯、更為後編之案也、付誅直諫、禹拜善言、由此觀之、謗毀之加己、正它山之石而所以砥礪名行者也、不其然乎、時晨鐘一轂、睡魔正去、座客不在、祇聞戶外啾〻之

国立国会図書館　当世奇話 2巻 208-156
ガラス使用

聲、蓋鳳朗已死、恐其鬼哭、

婦子必讀

當世奇話 初篇巻之上

何屯異館内著

許水滸羅貫中罵馬琴

曲亭馬琴ゑるとしより下町の偶居を居めゑるとゑ山の
ゑの色郭へ引籠ゑづくゑ筆翁の困極ふたゑつべ著
作をもつゑとして妄ふ名の華と吏ゑづ年
来丹精の八犬傳も結局ふ中ゑび世上の評判ます
ゑく作者の部でハ第ゑ高人ゑく後ふ来者ゑと

国立国会図書館　当世奇話 2巻 208-156

ガラス使用

いろは仏翁のことりとそ利行の書肆ゆきもの識の
醫者おど大ふをそ亜服しる絵ふ馬琴服中人り
ことろえりしが或日玄関へ一人の客きりそふ板
をを方より来りしる者あるが面談いたしたき事
あつてとぞ〳〵世尊まうもちり所者と人へ通達りさ
るべしと拵板ふ業門をもものあり名次の者ろれ
いろも書肆が戯作をものそふ為ひいろく板
風ものうをとかひるが吾凡絵高あ中〳〵く

伯分日ち人とふあるもをものあるもん
とかくと巨人ふるふまづとるふ人絵ふれとなれ
ばやがて書齊へ徒ひ合るる客をもろ昂絵と上座
とをり俄左丈のこ味線ひきら板をて天井板を
ふくとつめこもふがろとをりうへり嘆ぐひ合ろして
さそいふやう曲亭馬琴と足下るる吾儂と羅
貫中とは漢人とそふが拙者水滸傳のるふつき彼是
内辞を蒙り其中心ゆがそれとどもあり杉文

国立国会図書館　当世奇話 2巻 208-156
ガラス使用

貴著れ八犬傳もまうさば水滸傳の翻訳あそ別段
ふめるこゝい妙事といつべもうく姓名をとりう人数
をへらゝ唐山のこゝを日本の喋ふ侍さまざまるる
ろに奪胎換骨古今の出来ぐ高慢いこゝ
ゞ行こゝいこゝ一二ケ條中こゝそ
こゝいこゝもこゝこゝこゝれば馬琴心中奈かゞ
紀年生なのゞ八犬傳の自慢そ水滸傳い趣向ふ
粗悪がある方ゞ〳〵さも〳〵悪にせ〳〵見もあれば背中

ふ婚行をゞ〳〵羅貫中と和さこゝ蜀をつゝ
てこゝもこゝ紀のを例の戯作とたのこゝふ寄〳〵
者あこゝふひ仙神の千丞あもあこゝとの戯作
こゝとんゞ遊戯文人ふひこゝるこの武とふのひこゝひ
こゝゞめこゝぬこゝね老人こゝれゞこゝれゞこゝこゝ
重方のこゝ出是れいこゝひもなく出等かれか様
分ふこゝまこゝて面目こゝ上こゝ新発明ふこゝんゞこゝ
唯今ふあれゞこゝれまこゝる事こゝもハ和明和作こゝ

国立国会図書館　当世奇話 2巻 208-156

ガラス使用

ざるところ多りあり下拙世の著述と雖公儀の糟粕
を舐りあちこちとつぎ〳〵成しと雖まことに〳〵多
〳〵るところ多れども中〳〵をいうて水滸の誣譎い
〳〵その惡口をまうすものとの儀を聞て下拙に於ては
とでざるといひてをもわび羅貫中うつくとちもう
ひ足下い吾儀漢人なるをもつて如此彼名おみど
續〳〵とあるまいとの不審あるて左程之誣言申いつる
をでなくひ正人君子の形状をもまもとりみも文

筆を弄して人ふ勸懲成さるものがかのれがんば欺く
ともあまりなさげさ魂ぎうつうまうて玄同故意
女水滸傳などよろ〳〵とありまう八犬傳の端書をと
を續てあがえがあり〳〵水滸傳を謗ぜる已ふ
足下水滸傳ふ二等の題内をつけ初八稗史半八麿眼
絶ふ忠臣とふ説をとる金聖歎が七十回ばかりて全部と
もるの説を駁〳〵公然と自放うてたら羅貫中を
て今ふあう〳〵もるとも必ずが言ふまさがんるとも書ふる

国立国会図書館　当世奇話 2巻 208-156
ガラス使用

貴がのるべきある紙足下の如き書まれ俗子等あてハ三等
の題目なども出来そうなことなれども学問ありげなれと
もそれいそれでも書ひとりの説よりて明友門人などハ
もそうなりけれども判布の通筆などもちにあまさ
へ千古未發の所謂俗者の隠微を見出すこの高慢
ハ他ともこれとなり紙聖歎が七十四をもつて大團
圓とするハ必拙のもの説なり千載の下吾儂知己
ともいふべき言なるふ足下こそ若七十四をもつ

て全部とせば未一等沖殄なるうもれが作者の本意をも
らずとそ学理ふ宋江が方臘をうつもの成材なる近松
門左衛門とやうが作なる浄瑠璃ハ訛利なるこちらひ
吾儂深意のつて編述なる水滸傳をゆく足下の眼力
をもつて是非をいふるどハ押がつよい今こうみふ聖歎
ぶりなる所以なるとこを論ぜ玉駱駝蘆儂
水滸の英雄こそまうしを逆ふ異用が誤解ふ歟ふひ
ようせるをこそ孔子ハ春秋の書法ふ寸ひ麟と獲

て業を絶ずりとらんとしてこれ作者れいんびをひら
ずりいんや天下遺されば慶長の稚江湖ふあるとい人
最初の論ふひたついそうれば多さうあり一部のふ説
をとりて遂ふ醸経ふ一ぱるい聖教ゑ後辯の気量
みて吾儂知己といふ爲ものいこをもつてあり是下ゑ
筆ふ題向ゑどこれ日本人の俗見ゑ者の作者の狂
言ゑかくせうふそれ云めこのゑんゑのゑんのといふい
この言のそうみふるいこうりいふも吾儂萬巻の書を

よんで安邦定國の大略を胸ふ蔵むとしいへども昔時宋
の改ゑぐれふ人姦佞ゑ朝ふ満ち正人忠臣の野ふふくれて
有志のゑの擯斥せらるいんとも世ゑ紀ゑ多く史筆ゑる
ゑふへつらひて後世ゑ歌くことの多さふより満肚裏の不平
を水滸の豪傑ふ寄せて後世ゑるものゑうされば筆法夫
ふゑまるび竊ふ當時の君臣を笑刺して知己を千載ふ
俟ところゑ一字ふて褒貶ゑ寓ゑることゑ源如ゑり豈足下の輩のゑく萬一をとうぐうところゑ

国立国会図書館　当世奇話 2巻 208-156

ガラス使用

んや足下まさ常ふりふ西遊記い人さうす水滸傳い人おかし
ともふ其中を得ぎと為ぎ自他の八犬傳をもつて西遊
えいりぐ
のよ不安るとの不倫であうんぐ西遊記い道家の洒落あく
老子ぬ微意を寓せーめるれば尋常の孔眼をもつく
積ひべらふあうぐ悟空悟浄八戒のこ人を一部のうそめの
あてこ天の使宿ふ配るるぎど奇妙ふ子丈の出あるめ
うそ足又足下輩の眼力のとぐねとろうう水滸の一百零
八を人投おかーとのーるふ上天星宿の配意をまぐぶるあ人

りそべてふ説をよひふぐで俗諸をかがえさるりでい大
意がコろうねものーどやりぐもも深意あつて為ーとろく
足下の八犬傳ぬやうふとと俗間の軍書ふある里見の八
犬士ぐの大内の十格士ぐのといつよりおりひ有る人数でおけ
ぬぐ不審ふおるよもとろと自ろうとく書ぐんて見よいて
きふ為そある八犬傳もあまり出あるる趣向でもあるこい大
諸候の女ぐ金銅の犬と配合の一像ろ車出るるどあ出
り非類のとりありせふて固舎料理ふもきつことが為いこと

国立国会図書館　当世奇話 2巻 208-156
ガラス使用

犬を高貴い汚されたとも富山の山中なる犬を食の代りとして暮すことなれば養ひ恩をめるべきまた七種水とて七月七夕の情景
して犬をもつて犬のるゐり足下先年燕石雑志を著せしとき狐を妖人ホ化せども人と交合をなすといふ事とそ樂
天の詩を引て論じらるるかゆえがめべしいふ仏
ものがたりをもつて犬の孤ゲ英雄と出現し秋水燈の起ホ
比をるなどいふきけうたとうり人道滅都のものがたりが偶忌
俗の関ホ叶たとそうゐ程のる柄りがるいねとるべく序

ゐるバヤベし足下燕石雑志を著せしとき北静廬翁ホ
批評せらるるが返答の出るとき所なり所嘉雑記
記へうさのも上梅へ辞廬翁の名所ゐさ人一録
成ひて彼かもうをてるうしこれらのことものまだ不業
ゐり付外京傳と絶交して今の京山なるべいホ外の無
沙汰をゐるべくせん年書画會所をもとそ配りめの沙
汰をして京山を訪ゐる始末なるべ市丹の匹夫もるさるる
しこころゐり足下ゐさ在社自性といふこと沙好んでゐく

くさらるゝが足下のうちにもとより仁義をしらざるも犬も同様なる
またた犬がさとくして犬の傳をとらへくるも其性の犬に類す
まゐらんとこれまでの名を捨自性にちがひしと散々に悪口を
いへども馬琴一言の返答なくあやまり入て居たりけり

論俳諧桃青翁懲鳳朗

青年大坂の町人花屋某の後園にて世を去りたる桃青
居士江州粟津の木曽寺に霊をたくして居たりけるが
ちかごろ遠忌にあたれバとておもひがけなく玄猶紳家

より花の下大明神とあがめまつるべきよし仰ありければ
るかなぞ桃青居士眉をしかめてさてさて怪からぬこともあるもの
かなわれ生前なんの功徳ありてかくのごとき勝号にあづかる
にや古池に蛙のとびこむの発句を千萬言つらねたれバとて
更に世教に裨益あることもおぼえざる我生若風流
のこゝろえちがひよりあるひは乞食のすがたをして大切な主人
の禄をはなれて世界をまどつきあるきして死後迄めんぼく
なくそれがいまでも藩中に発句俳諧などするものあれバ

まゝ我まをして人の家で死ぬるあわれがよいと
うけあるゝゝゆげゝゝく男人ほどのことを実に能楽外ど
世上につまらぬものいはれど別て我死後百年の来る十
年来このゝさの能楽師かどつまらぬものいわれ我毒生
のほかに世の中にまさひゝけさうれ也名聞をもる為
時のやうなとぶいるかみの折をさとで今時の石倍力と
入也てもせんさくのもたぐれなるけで誤りがれ
くけあるいろて異服の人に批評せるゝと一言も

あいて出られで其非を我意のあるうにて
徴り所補ひてられやうにせどそのひがを知えるる
服がるいうとんど得りを規則とんえでもあるが
為のことに為が弱でも理を非にまげて助る為異質
のりさみゝて文盲中間の親王よりあるの人を
りはゝゝあるそつゝれをられ為るに我あげを
が能楽師どもこのゝうをもはれ是に我はあげ賜
など代異ふりけ祖翁の徳にあふひものざなどとの

しう侍る族もありさてひ能楷が風流のさちふもせう楷義
どうやうふ位をうけうけ給ふ所よりこぶべたもぐらめるべきさ賜号
の四海法めりとそも我ふりて再三再四辞退ーーしべたりそ
本望ふ弟を推礼をうけびとりめふれのつれそ長谷
るてさひをのうまーて花の下宗匠とい号をもうひ
ちそよりとび侍る風朝ちを云白痴いりどを盛忘のせろ聟
爺ふのつて廟前へ参ーーとめりぬものいまい男ふ偶居す
ときけりまづこの者ぬとして諸国の俳諸師どりへ傳へ

くうせんとそうふおのひ起ーー例の愛笠頭記袋仍御
の紙あて半速ふ江戸者へ若ーー其日ぐふ風朝ら宅を訪
んとおのひーーがいやーーめうろたふ忘日ふめるれが定めて
れが宅へ大勝らのともがより集りて居とうんすづ今明日
ちそそらこてら伝見物せんとて俳諸師の家をとを
りてそうれどもいづをも吐せさうなのれ一人もきーーら板婦
ふそぶ仕市のものびーーー見熱の松ゲ一本めりるどてろ
く国ものうるふらの風俗ふ似ふれが元禄ろうの松ゲと

国立国会図書館　当世奇話 2巻 208-156
ガラス使用

うちうちそそる俳諧師の雅ふ桃青大ふ感傷しかこぶ
がしてあちこちおとろへさる河をあげたるかどをく長日ふもうり
なれば桃青の霊仮づくれよ自然堂風朗が宅へいうそうふ
蒙れたり〳〵文言でやい大物より集りてうみを芭蕉忌をうと
てつまくぬ歌仙などを結て居うり座敷の床の写ふ自分
の木像をを忍ふ〳〵びとれ幸ととうとそうの木像
(霊を拝〳〵ちどく拝のをうびひかうかうて歌仙も
うそうふびめとふ酒めりとをりおの〳〵十分ふ酔ぬと

をうりるが主人風朗ハ今日の受納の多寡をあんど居うり
あの色ハ百文この日銭を酒代とだうりめるが二朱ぬ銀五匁
めぶ百文ものうりなどさまく〳〵まうをを另しうるが忽ち
座の写れ木像聲ををうり受納ハ仮ばめんじるを
うれ酒の代づくハ十分ふうんといひれば風朗大ふなど
ろさうづられい平生ふがが俳諧のをちをを忘しふうしたふ
花の下の大宗匠とまでうりうれば祖翁も華ぶ
ろ感ふあつてうふそうぶも言葉ふみのふうべし

国立国会図書館　当世奇話 2巻 208-156
ガラス使用

国立国会図書館　当世奇話 2巻 208-156

ガラス使用

と慢心を生ずイヤされハ和入るゆゑ言葉なりまう志う
年々ゆうゆう不同友うちより一杯の酒のこころ〳〵意をこゝひ
まするもこゝろ者公孫の内儀を志ひ風流のこゝろ不仙
あらへばうりとりつゝ木像めざ笑つてよう〳〵風流ゝとは
まゝあいのことぶ風流というるものと心ゆうゆうん
ゆうゆう風雅をして物をゆうゆう不ゆう豪富の所人
ゆうゆうへとり入幇間おどゝ酒あがつてはぢをいとど内ゝ
ゆうゆう幇間おて酒食をひさかりゆうゆう風流ゝゆうゆう

是ゆゑ〳〵いんやうゆうゆう忌日をゆうゆう吸家ゆう洋場場の
ゆうゆうのおどく一金のいゆうゆう銭をめつめくまで受納かゆう
をゆうゆうおどゝして伽れ風流とあゆうゆう風俗のゆう
ゆうとけいのんおどゆうゆう者一ゆうゆう黄泉の下ゆうゆう
ゆうゆうの外ゆうゆうゝゝぞんぜるゆうゆうゆう一雅郷ゆうゆう
ゆう史記ゆう俗習ゆうゆうを稱誉のゆうゆうとあつてゆうゆう
風俗ゆうゆうびされゆうゆうゆうゆうのゆうゆう長方ゆうゆうかゆうゆう紙ゆうゆう
んぜず俗世平話ゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆう

国立国会図書館　当世奇話 2巻 208-156
ガラス使用

てあり。〻持参のうち洞ちゝび手ずめの書を十七書あ
らるゝうち聞合しいくども乃至を考へ〻ひづら
ん 真洞学びて真洞ばかりとなりの一人も多く能楽と
も連歌とも名のつくべき一種あるべきこと
うらめうらめば能名づけひとをとるどりかたの一切のほりの
かりてあらうもせんとて人参の候名のひとを洞めをえ
ずとも「あらひとを」をひとをも「あらいとも」ふとて
その真めとされば人生れ〻ばこと出るの人言語同断のことも多う

これらのこゝの始をこの後日あらうといひきをて十六の年長谷
寺田の遠忌あるうんとて寺奇事あるし父悦れども花
の下宗百の号をあらひ小仏あり事ぞそれ能諸をまうあ者れ
浮世あらんかぎり樹下一瓢の境界をまうひ浮世の塵埃をえ
ふ見て真道の美之味おうらぶれがたきあり苟も名聞ふ
ふあつて文をも能諸の家百とあうんをも方貴人の巧高庵を
たのゝ例の文育代金あるも洞ふ花の下宗百ふ
名前をあらひこゝあるーけをそれ洞ふ

国立国会図書館　当世奇話 2巻 208-156
ガラス使用

長方より往中ともしうしゝなりあり
下大明神の賜号も長方どもまこの人間ういれるもやの
て四所まゝもとべたとうふ弾ともはけさうんざうどうれゝ
て却てこの方ども頼ずしてひりふるれへおれ外まこと届
至極ありはんそこの事をとわらべやはれ生家このち
ふふけり主人の家を出て不忠不義の人とおしこいまこと
ふゝくうべれ後悔ふ為ふべんぞうこのどもの人も
能諸ふどせねゝふゝしてすとしい世上の用ふもうべれ乃紙

まうべいことおのふとこのありそのようこびね通紙りつて費
脱せうこと行限いうたとうるゝ長方どものやうふ
ひが本像を刻庶の男人ふたまどもるれひがようこべ
さとの子男ふうんがはけつしてこれ紙ようこが子天下の人
をひとひそて文盲ふ写ふ為ようし異服の人ふこうそがく
ふゝくまこと能諸ふどうして世ふ人ふ人の
家で死ぬるとふどおのつてもつうれべ以後ふが本像や西像
ふとの仏法必無用うべしうひが息ひあり命ふ祖翁

と、唱ることもなくあるべし無用なりとぞ能諾の祖師
なるとぞ云ひ伝へしかりしとぞ云ひ伝へ
聞ちがへ満腹の人々あれ共とそなるべきなり概して霊験
してきこえしかるに能諾をあわと云ひ伝へどの
ものも精を学ぶつくせがなれば音沢能諾の
祖師とあるとぞ花の下大明神の駕籠を其
方どもより四辺過まうし返上ふあるべ
山一事ひとふしひとつなり世上の人々も能自仏法

るべ夢又雁巌得無真外の能諾師どももつて分らべ
とて蕉翁の霊ゆりの本像ぞ
董太史塩河岸訪盛儀
松本董齊董玄宰は兼法を自得し已ふ出藍れか
まれらく江戸も此一の名家なりとて自ら高高まして
居らるるある日能諾師よりこのまれる格言の板ものを
あらためらるるがあまり細字なれ能名みて精魂もつれらる
ふやあらず華をきをめて机あるうとともなくく

居窟るふ衣冠さゝ人物あつて董齊々と
ますあぞろとおどろ見をひらいてこれ沖見るる
一向これまだ見しらぬ人ありされども容貌さゝものとも
見れば居るあの着板なのこと子あさものとも見へざれば
何さるあるまるふ居るずとしてて多沖ついて丁寧ふあいさ
つ居る彼衣冠の人いつあう我を明の太史董其昌
居るが沖が平生見が書風沖学とおつてあるわ家沖ら
きちらし醫者儒者僧諸師みど沖敬くことれつらあさふ

いさろ書法をうさんとそまのうう雖沖が師匠と
おのそる敬儀ふうろうきうせんとおのひ居が先年茅茅帝
老人来庵をいまめらとそ如こ奇諸ふあうこをう
敬儀が我書風沖害居るよ沖席ふいられるあ又
あのとうおのひそれぶう容敬いこ居ふ紙ふく
敬儀も死去いこ見ふ存念も空こうこうこうこうこ
見が書風沖活をあのうまづ一安心とおのひ
ところ近年沖が書おこうこれ董齊みどこうり

国立国会図書館　当世奇話 2巻 208-156
ガラス使用

国立国会図書館　当世奇話 2巻 208-156

ガラス使用

国立国会図書館　当世奇話 2巻 208-156

ガラス使用

ゆゑ人ゝが性を盲し一芸昌をきわめ
ゆゑ人ゝ倨傲不遜にして
いうるの輩しかるに大神法帖押そもおし文字
ある者ハ結構雅致ハ源流をもとゝ
右軍押ハ帰宿ら一石家押陶鑄し萬象ハ出入
心を自然ハ融化して
書を綜ら書を
気韻生動ハ跡放るゞゞ
冥ハ適と押ハ
範とするの凡眼ハ
ハ筆押拙ともハ
家をハ誰ら右軍押師
法をとして門戸ハ
一家をなしハ敬儀を
の仮ら人と押ハ
あゝ人これらこれハ

俗華をもつて生涯の軌
論ともなるの
代の書
流ハ
融會し
畫々字々形容
法ハ
近日書家と唱

国立国会図書館　当世奇話 2巻 208-156

ガラス使用

あの比々ゝゝゝの病あり敬儀がはれ沖ゝ董堂と
稱しゝゝゝ書ゝ似せむとて意沖きゝあて摹倣し
これどもこれも安ゝゝゝ書論をゝゝゝゝる白氏九
わゝゝゝ書法をゝゝゝゝゝゝゝゝ花氏ゝ字體のゝゝ
をゝて偽沖ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ白氏晩年骨格ゝ
ゝゝゝ書風ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
尾まゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
藥店ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

白氏一時廛名沖ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
人物ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
我ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

とられしう王子敬名家のまうといへども自立て河翁
の牛後とまうさんと欲そこなる古人をまなびのつ
如法海もよく日ごろ書風をまなびそこなひて
俗ごろ書風をまなびそこなひて紙をつくの
ちんのある筆紙りちどりく青の出るやうなる紙
なるべくしいふ花白紙まいて唐紙のやうなる程
とりつけたとひまへ有ひまへ有ひまへ有ひまへ有
字とらふ筆法まうんがとれいちまうらんやの永字八法と

りもかとりとる仕方ありとれども暇のつけとろ紙とり
えこと出くるもて学問でもして学論紙よむやうすべしとろ
胸中の俗気を胸治し風雅の道をとろわげ俳諧師
などの文章紙文とうたべうべ謎で我都よりもむとて
なれとそのまま老ありあらるるあぞ董齋ちとれ入く
平伏しうんとうんやもく空もりとる風情見さる
ふ頭紙撞えべ董左史うちとうつてさそ〳〵思はれる
よろさ男ありまさ撞くひうを七変ともあれども今の

208
2
156

ぶんそんとゞまりてかとゝまるまゝにそれゞ十年も経て是同じく仕
しがくさて書論のちもあるやうにうさゝび長せうまき
くらひきうすべしーされどとりつてさうさうて忽ち形いとえ
すうれとえ家婢茅屋にてあるうはかりなる出来ほ
さとりつゝおもひさもれがこれうえ南柯の一夢

すりうる

紙子
必讀 当世奇話初篇巻之上終

国立国会図書館　当世奇話 2巻 208-156
ガラス使用

208
2
156

国立国会図書館　当世奇話 2巻 208-156

ガラス使用

国立国会図書館　当世奇話 2巻 208-156

ガラス使用